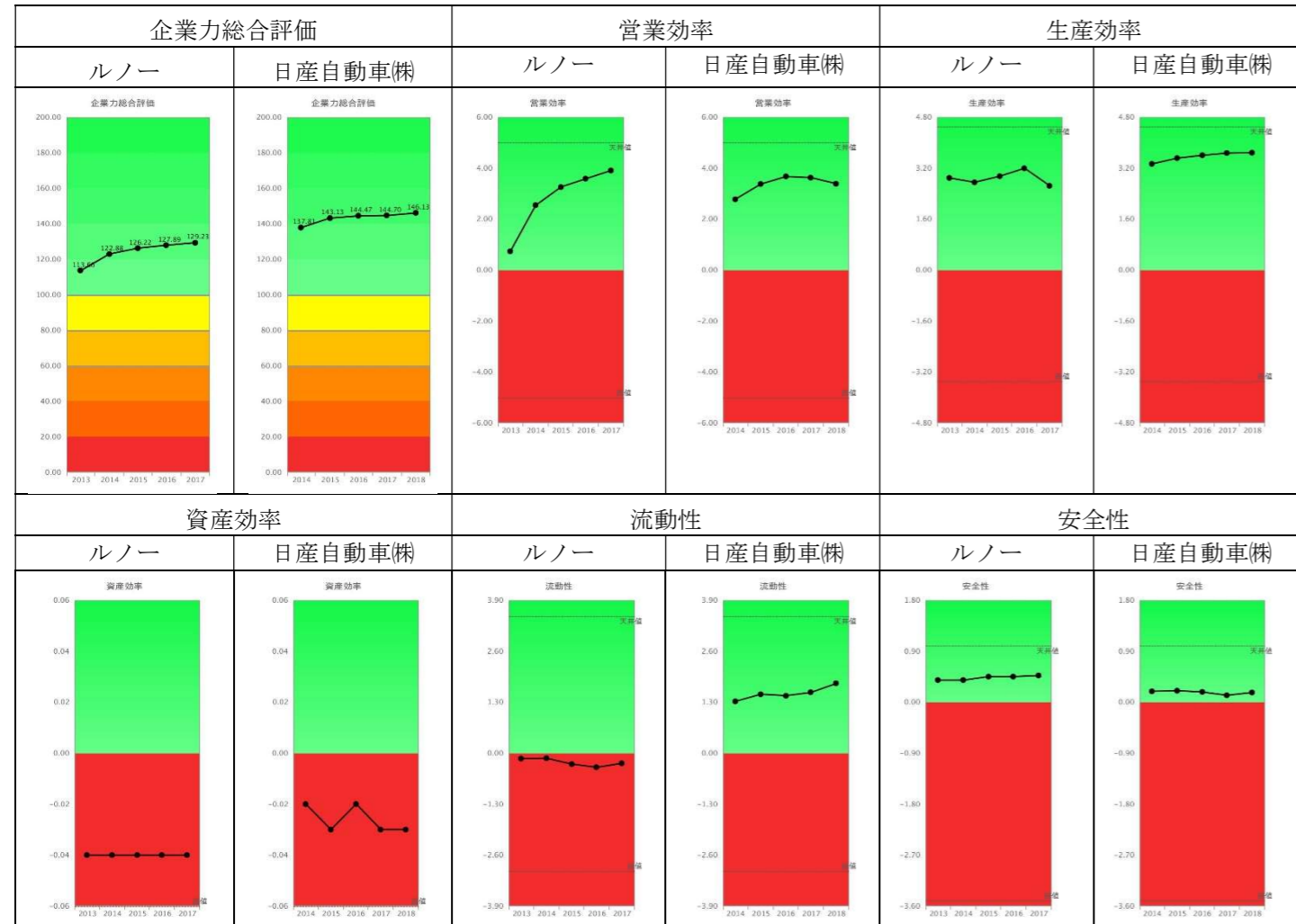


企業の目的は存続・成長と言われます。経営不振であった日産自動車株式会社にゴーン氏は1999年颯爽と現れ、日産リバイバルプランを打ち立て、見事V字回復を果たしました。企業の成長を定義したSPLENDID21でゴーン・ショックを解説してみましょう。

ルノーは2013～2017年12月期、日産自動車(株)は2014～2018年3月期までの連結財務諸表を分析し比較します。なお、ルノーは日産自動車(株)の議決権の43.7%を所有しており、ルノーの連結財務諸表では日産自動車(株)は持分法が適用されています。

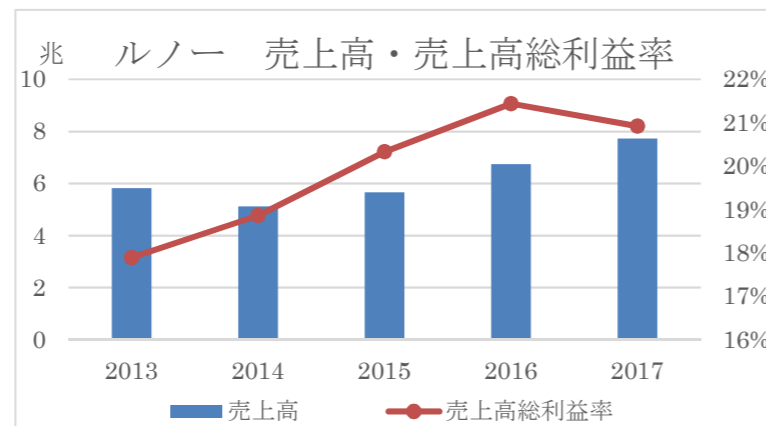


ルノーと日産自動車(株)では、日産自動車(株)の圧勝です。2013年のルノーは48億円の営業損失を出しており、日産自動車(株)の持分法投資利益2129億円がなければ、経常損失でした。その後の営業効率の改善が牽引して企業力総合評価がじわじわと上がってきたのです。

ルノーの営業効率をドリルダウンしてみましょう。

右グラフはルノーの売上高と売上高総利益率です。なぜこの2指標だけを取り出したかわかりますか。これが、ルノー自身の自動車製造販売の成長を確認・予測できるからです。売上高は2015年以降増収、2017年失速したとは言え、売上高総利益率も改善しました。

次に営業利益・経常利益・日産自動車分の持分



法投資利益と各売上高利益率を見てみましょう。

本業でいくら稼いだかを示す営業利益は2013年は赤字、その後伸びています。その営業利益の金額に足される収益の一つが日産持分法投資利益。これは、日産が稼いだ利益のうち、ルノーに帰属する額です。この持分法投資利益他が加減算されて経常利益が計算されます。日産の貢献もあり経常利益が伸びています。

また、グラフは示しませんが、日産自動車(株)の20年間の売上高営業利益率を確認すると5%改善に1.5年、ルノーは3年かかっています。

ゴーン氏は、ルノーに1996年、副最高経営責任者として入社後、ルノーに在籍しながら日産自動車(株)の社長を務めていました。以上数字を見る限り、ゴーン氏の手腕はルノーではなく、日産自動車(株)で発揮されていたことになりま。

ゴーン氏の行動に何等かの不都合があり、ゴーン・ショックが起こったにしろ、なぜ、これほど日産自動車(株)のV字回復及び維持を達成したゴーン氏を解任するに至ったのでしょうか。それはルノーと日産自動車(株)の財務数値を比較すると合点がいきます(2018年をルノーは2017年と読み替えます)

ルノーの売上高総利益率は2016年日産自動車(株)を上回り、その後差はどんどん広がるばかり。ゴーン氏がルノーに力を入れたのでしょうか。

ルノー支配が続く限り、ゴーン氏はルノーの最高責任者として日産自動車(株)に容赦ないコストカットを要求し、更に支配権を強めてくるでしょう。賽は投げられたのです。

まとめ

ゴーン氏の専横に反発する私情からではなく、西川廣人社長は、よく数字を見抜き、日産自動車(株)を守る為にゴーン・ショックを起こされたのではないのでしょうか。ゴーン氏を向こうに回し、日産自動車(株)がどう舵を取っていくのか、これからが正念場です。

編集後記 ゴーンさん、ご自身のリバイバルプラン策定中。すごいプランなんじゃないかな。JYの無責任発言は続く・・・(^^♪ **文責** JY
〒541-0052 大阪市中央区安土町1-6-19 プロパレス安土町ビル7階D号 株式会社 SPLENDID21
tel 06-6264-4626 ☎ info@sp-21.com 過去のNEWS、セミナー情報は <http://sp-21.com>

